

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩展 巔」

小川原脩は、その長い生涯にわたって山を描き続けました。幼い頃から見つめ続けたニセコ連峰、戦後郷里に戻り描かれた四季折々の羊蹄山、そして晩年に訪れた中国、チベット、インドの山々。日常空間の背景として、自然の美しさを体現するものとして、あるいは精神性のシンボルとして、山は常に小川原脩のかたわらにありました。1981年に描かれた作品「巔（てん）」から始まる青と白と茶のコントラストは、時に山稜、時にチベットの寺院と変化しながら作品に繰り返し現れます。その時々で作品の中に垣間見える、創作の根底にある山の存在を追います。

会期：開催中～4月16日（日）

■企画展示

「版画の魅力 素描のたのしみ－武内コレクションより－」

当館の開設に力を注いだ故・武内一男氏より寄贈を受けた103点の多彩な絵画「武内コレクション」の中から、油彩画とは趣が異なる、紙にのびやかに描かれた素描や版画をご紹介します。

会期：開催中～2月5日（日）

「くっちゃんART 2017」

今年で9回目を迎える「くっちゃんART」は、倶知安町はもとよりニセコ・羊蹄山麓周辺で芸術活動に身を置く作家、さらにはそれらの作家と交流のある海外在住の作家が多様な表現による多彩な作品を持ち寄り、さらなる交流を深める、この地域ならではの国際性を反映したユニークな展覧会です。小さな美術館で、多くの作家が集う、賑やかな展覧会を開催します。

会期：2月11日（土）～4月16日（日）※初日は観覧無料

関連イベント「くっちゃんART 2017 アーティスト・トーク」

出品作家による作品解説です。どうぞお楽しみに。

日時：①2月11日（土）

10時30分頃（オープニング・セレモニー終了後）～12時

②2月25日（土）14時～15時30分 ※観覧料がかかります

場所：当館第2展示室

申込み不要、直接美術館へお越しください。

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

「ミュージアム・シネマ『宮廷画家 ゴヤは見た』(2006年 スペイン・アメリカ)」

日時：2月18日（土）14時～16時

お話し：柴 勤（当館館長）

会場：当館映像ルーム 聴講無料

風土館講座のお知らせ

最も春が待ち遠しい今の時期こそその話題です。花の美しさにはちゃんとしたワケがあります。なかなか気づくことのない自然の背景について、春から初夏にかけてこの地域の低地から山地を彩る花々を例に紹介します。見なれた草花が全く違って見えることでしょう。

日時：2月18日（土）13時30分～15時

講師：村上尚美さん（自然ガイド心和主宰）

演題：羊蹄・ニセコの花暦 春・初夏編

その他：聴講料無料（展示見学を含む場合は、大人一人100円必要です）



小川原脩記念美術館 倶知安風土館

☎ 21-4141

☎ 22-6631

開館時間は9時～17時
(入館は16時30分まで)

2月の休館日

6日～10日※展示替え休館
14日、21日、28日

美術館から

お正月に帰省した折、上野の森にある国立西洋美術館を訪ねました。クラナハという500年程前の画家の展覧会は見応え十分でしたが、今回の目的はむしろ常設展の方にありました。この美術館のコレクションは、その名の通り、ルネサンスから20世紀までの西洋美術の宝庫なのです。とりわけ、印象派をはじめとする19世紀のフランス美術は、画集に出ているような名作がずらりと並び、いくら時間があっても足りない程です。

常設展を中心に据えながらさまざまな切り口の企画展を展開する。これは美術館の理想的な姿の一つです。その点、小川原脩記念美術館のあり方はまさにお手本通りとも言えるでしょう。

館長 柴 勤

海と山と田園とーミュージアムロード情報ー

【クローズアップ】西村計雄記念美術館

開館17周年記念展「西村計雄・山岸正巳それぞれの道」

会期：開催中～3月12日（日）

■西村計雄記念美術館 ☎ 0135-71-2525

■木田金次郎美術館 ☎ 0135-63-2221

■有島記念館 ☎ 0136-44-3245

■荒井記念美術館 ☎ 0135-63-1111

感動一点 の場

『雪の中の犬』

1973年 小川原 脩 画

小川原脩の著述文「白 冬の中の思考から」（北海道新聞・1975年）は「小降りの雪もやんだので、小高い丘を上がっていった。あちこちに身の振りかたを決めかねているように笹や枯れ草がつつ立っている。足跡の絶えた小道を曲がりくねり、若い落葉樹林の中へ入っていく…」という一節からはじまる。そのような情景の中で、ここに描かれた野良犬との遭遇があったようだ。

「とにかく動物を描くのは楽しいし、自由にやれますから」、その結果が、小川原の描く動物たちの豊かな表情に現れている。1973年に雪原・枯草・犬のモチーフで描いた作品は、このときの小川原にとって何か心に留まる組合せだったのだろう、数えてみると当館に7点もあった。雪の斜面を駆けおりの伸びやかな姿、どっしりと座り込みひょうひょうとした顔のもの、埋もれた拳句に吠え立てるもの、手足を埋めながらも渋い表情で歩み続けるものなど、それぞれの顔を見せている。そしてこの犬は、雪に埋もれ足が抜けず、ちょっと困った顔をしている。この季節、どこにでもありそうな、枯草が突き出した雪原。今、野良犬に出会うことはないだろうが、ふと身近にある光景のように感じる。



文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

—羊蹄山麓の湧水—

冬の間は姿を隠す日が多いだけに、たまの晴天のときには特に美しく見える羊蹄山。ご存知のように、この山の麓にはたくさんの湧き水がある。火山灰からなる山体は巨大なる過装置のようなものなので、水の湧く泉は大小それぞれ無数と言っていいだろう。比較的大きな泉として17が報告され、その分布や湧水量から面白いことがうかがえる。

羊蹄山の麓に分布する泉はすべてが標高270mに位置する。麓の西半分には多数の小さな泉が、東側には数は少ないが大きな泉が分布する。そして東側の泉で山麓全体の湧出量の3分の2を占める。最大は京極町の「ふきだし湧水」で、一日に5万トンの水が湧き出している。

昨年の夏のこと、大学の野外実習でこれらの泉を調査し、水質の分析を行った。調査結果から、いずれの泉の水も飲用に適していることが確認できたのだが、興味深いことに水温や水質にも泉で違いが見られ、さらには水の味まで違って感じられることだった。

飲料水の説明で「適度なミネラルが含まれ云々」と聞いたことがあるだろう。ミネラル分は多いと水の味を損なう一方、少なすぎると体内で健康を維持するために必要な鉄分やカルシウムなどを体外に排出させてしまうので、日常の飲用には適さない。そのミネラル分を多く含む泉が南西側に集中し、羊蹄山の成り立ちの一面を示すと考えられた。一方、周囲を耕作地で囲まれている泉では、畑の肥料に由来すると思われる成分が含まれていた。

水こそ生命の源であり、上質の水を供給する泉は何物にも替えがたい共有の財産である。その恩恵を長く享受するためにも、大切にしたいものである。

ふる探訪 さと

407回



文：岡崎 毅（倶知安風土館館長）